

道匠造像記 (龍門二十品の一)

六世紀
初期頃

古典碑帖の窓③

木 雜

木 雜 室

伊 藤 滋



てみてください。起筆、転折をはじめ、字形の構成などに共通するものを見ることが出来ます。恐らく刻者は正確に転写(ノミ)で刻したのでしょう。

た横画、横画から縦画へ筆を轉回する転折などは、龍門特有の特徴を具えています。これは毛筆で書かれたものではなく、刻者の鑿(ノミ)による表現ではないかとの意見があります。

龍門造像記は、六朝楷書を代表する古典です。数万件とも言われる造像記の優れたもの二十余種を「龍門二十品」と呼んでいます。その力強く、粗削りの点画を具えた書は、近代の書壇に大きな影響を与えてきました。現代でも多くの人々を魅了しています。六世紀

の龍門の石面に刻された書は、当時の毛筆で書かれた書と、微妙な点で異なるのではないかと言われることがあります。ここに示した「道匠造像記」から選んだ六字を仔細に見ると、どうしりと強烈に打ち込んだ起筆、逆に穂先をそのままに停めないで細く送り出し

りと強烈に打ち込んだ起筆、逆に穂先を選んだ文字と左の龍門の六字と比較し



父



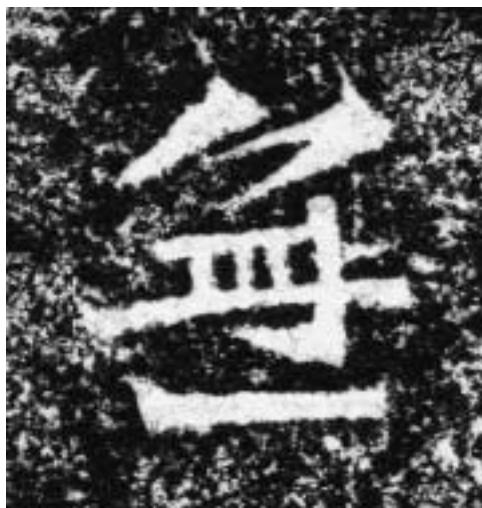
方



母



塗

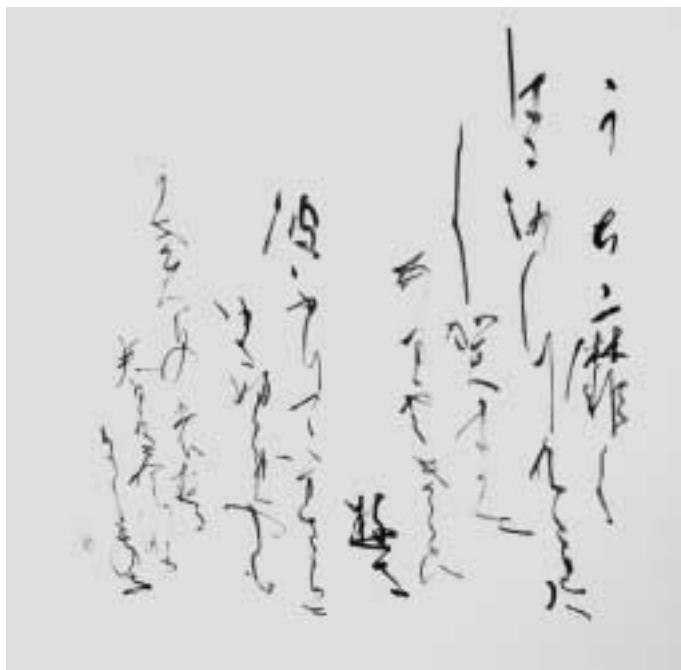


無



隆

書道藝術院 平成の書(2009)



第62回書道藝術院展「春の雪を詠める」



黒川 江偉子

財団法人書道藝術院
理事

遠い昔、小学校に入ったばかりの頃、一人っ子の私は、父に連れられて、書道塾に入門。昔人間の父は「女の子はせめて字が上手でなければ」との信念で上野の泰東書道院展等に出品して、賞など頂くと大満足と一緒に見に行き喜んでくれました。

それから戦争中は中断、戦後、子供の手が離れてから、かなに憧れ、家の近くに来られた神郡晚秋先生の温知会に入門、其処で、永井幸子先生とお会いし、直接神田のお宅へご指導に伺うようになりました。

その頃、永井先生は熊谷恒子先生に師事され、また更に大字仮名の勉強に岡山の内田鶴雲先生のもとに通う等、厳しい修練の日々を過ごされて居りました。私達門下生も、書道だけ見ていたりでは駄目、音楽でも絵でもよく見聞きする事とおっしゃっておられました。

まさに先生の書は、遊び心が美しい裏付となり、古筆を熟知した上の、何とも云えぬ、近代的魅力溢れた作品となり、私達門下生一同を強く引き付けてやみませんでした。

先生の三回忌の作品集に寄せられた、書道新聞社社長の滑川雲山先生の序文に、

「多くの門人達や書道愛好家たちに慕われ、愛されながら、女の一生を『かな』書道で燃えつきたといえる。立派な闘秀作家であつた。」

と結んでおられます。

私は作品を書く度びに、敬愛する先生の眼差しを想い、この道を続けて来られた事への感謝を深く深く感じます。

62回書道藝術院展の作品

白の羅紋箋に万葉集、雪の歌 二首

「うち麿く春さり来ればしかすかに天雲霧きらひ雪は降りつゝ、今更に雪降らめやもかぎろひの燃ゆる春べとなりにしものを。」大作として書きました。

白牡丹二輪揺れをり遠くあり

書のひろば

理事長 恩地春洋

和京 小山鳳来 佐藤無極 清水翠径
浜田尚川

第61回毎日展鑑査はじまる

第61回を迎えた毎日書道展は、出品点数の減少が心配されたが、三〇〇点の減であつたと聞いている。世界的な新インフルエンザの心配の中、5月21日、審査員総会、5月22日～24日、国立新美術館で入賞作品の鑑別（入選・落選）が行なわれた。この後、6月26日～28日、会友出品作品と共に表装されて審査され、入賞作品が決定する。



「自彊不息」

香川峰雲 刻

書道芸術院の 理事会・評議員会 報告	
―人事を中心にして―	
(財)書道芸術院、春の評議員会、理事會は、去る5月17日、上野精養軒で催された。	
1、平成20年度 事業報告	2、同 決算報告、監査報告
立金 (略)	3、平成21年度 事業計画の一部変更
・東京都美術館代替会場対応積立金	について
・事務能率改善 ・ホームページ	・5年毎に行う記念事業のための積立金
・総局支局の普及活動 ・他団体展	・総務 (16)
の支援ほか	赤羽蘭徑 有野玲扇 江本興舟 大嶋
4、人事	珀壁 鎌木梅道 菊池富美子 国島春枝
〈第63回書道芸術院展〉	早村春鶴 福島和子 松村くに子 宮崎玉喜 安田啓子 渡辺秋湖
(1)峰雲賞選考委員 (8)	尚恵 依田大洲 和氣しげ代
恩地春洋 辻元大雲 大野祥雲 浜谷芳仙 村野大仙 烏山岳風 黒川江偉子 齋藤雨城	常任総務 (13)
(2)大賞準大賞白雪紅梅賞選考委員 (15)	伊藤懷舟 勝山初美 狩野廣洲 佐藤香山 新堂葉扇 田中春仙 知野洛水戸辺白陵 西岡雨瑠 福島李舟 横谷山内孝石
恩地春洋 辻元大雲 木村船翠 小竹石雲 石井明子 金井如水 下谷洋子 種谷萬城 千葉蒼玄 津田和秋 池田	朝倉春江 泉 雪華 加藤紅樹 高橋

峰雲先生33回忌
5月17日は3代会長香川峰雲先生の33回忌でした。ご一家だんらんのひととき。
(下段写真)



左から香川峰雲、香川春蘭、香川俊哉、香川倫子、中村雅俊、比田井小琴、千代倉桜舟、越塙光代（昭和39年頃 上野タカラホテル）

監事 ○林竹聲○舟尾圭碩 百瀬大輔	理事 飯島春美 石橋鯉城 一色白泉
事務局長 星弘道（理事兼務）	副理事長 ○杭迫柏樹 清水透石○閔止
同 次長 日賀野琢（○印新任）	人 ○樽本樹邨
	常務理事 石飛博光○鈴木春朝○田中鳳柳 中村雲龍
	理事長 ○井茂圭堂
	副理事長 ○杭迫柏樹 清水透石○閔止
	人 ○樽本樹邨
	常務理事 石飛博光○鈴木春朝○田中鳳柳 中村雲龍
	理事 飯島春美 石橋鯉城 一色白泉
	今村桂山○薄田東仙 加藤東陽 貞政
	少登○高木厚人○高木聖雨 田中節山
	谷村雋堂○玉村齊山 大樂華雪○辻元
	大雲 辻元昌園○長井蒼之○日比野実
	○藤澤麦草 星弘道○吉田成堂 和中
	簡堂

漢字(三)

小浜大明

然できた作品には、人の心を動かす力
は存在しないと考えます。

古法とは王羲之が大成し、中唐の顏

真卿まで発展的に継承された用筆法で、

比田井天来の研究により復古されました。私も沖六鵬の著述により研究して

きましたが、深遠なものであり、正しく理解できているかわかりません。が、

簡単にいえば、丸い筆の総て

の面、三百六十度を使う法で

あると考えます。

書における用筆法は人により異なるものと思います。それによって、線も結体もちがってきます。昔の「古法」といわれるものの用筆の中には、思想的かつ哲学的な部分まで含まれています。漢字は一点一画の集合であり、一字表現には、この学習も欠くことがでないものと考えます。また、筆者の心を一字で表現しようとする時、書線の基礎を知らず漫然と書いて、偶

古法に対して新法という理論がありますが、古法は側筆が中心なのに対し、新法は筆先が紙に直角に当たる直筆だと考えます。一字作品には多様な線の表現が必要とされま

すが、多様性を求めるなら

ば、新法の直筆だけでは表現に限界があるうかと思ひます。

21世紀の書

—私の主張—

かな(三)

前田まさ美

昨年源氏千年紀にあわせて、下谷洋子先生は、「一帖一首源氏物語和歌集」を発行されました。

「百人一首を書く」「かな帖」「いは帖」四冊が手元にあります。

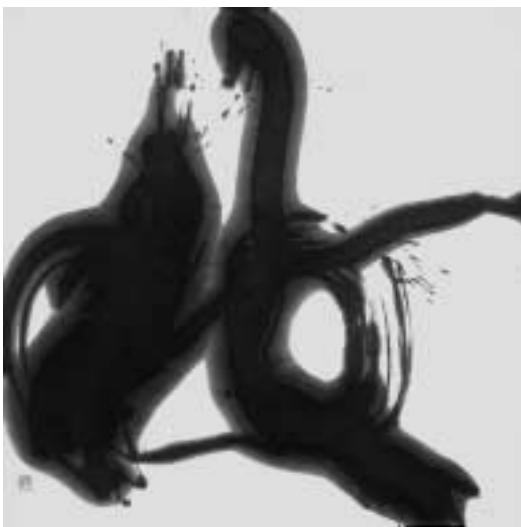
勉強しやすい形で出版されています。

これをお手本に勉強方法は、多種多様です。今回は、「百人一首」を細字で半切の料紙に作品を作りました。

墨を摩りながら構成を考えると郷里の山々が浮かびます。暫く瞑想の世界です。赤城山の雄大な姿、裾野の美しさ。榛名富士を中心としたなだらかな山々。妙義山の奇岩怪石の変化など、故郷の自然はかなの散らし書きにも似た稜線を描いています。

各行の高低、疎密の変化、行間の広狭、文字のバランス、墨継ぎの位置などに注意しながら、余白の美しさを出し、何枚か書いて構成が出来ます。

構成に気をとられすぎると、文字が我流となり俗になるので、古筆の臨書もしながら進めます。今度は、筆づかい、リズム、運筆の速度、筆圧、墨の濃淡などを意識しながら仕上げていきますが、最初のイメージとは違う作品が出来ました。筆は傷みやすいので二、三本用意します。赤猫毛、馬毛の兼毫筆で書きました。



「妝」

小浜大明書
120×120cm



「百人一首」

前田まさ美書

「書」と共に

福田令子

(かな部・審査会員)

風花舞う空を窓越しに見ながら、筆を持つ手を休めて、ふと子供の頃のことを思い出していた。

身体の弱かった私の唯一の楽しみと言えば、家の中で一人、絵や文字を書いて時を過ごすこと…。そんな内気な私が、八才の時大きな決断をした。それは「習字の教室へ通わせてほしい。」と母親にお願いすることであった。当時の私にとっては勇気を振り絞っての行動である。なぜなら、生後間の無い私を養女にして育てくれた家庭は、祖父母・母・兄と私の五人暮らしで、祖父と母の内職によって生計がたてられていたからである。

婿取りであった母は、二十代の若さで夫が戦死、二人の子供と両親の面倒を見ながら、父亡き後、生涯独身を通した。どんなに苦労があつても、いつでも明るく凛とした母に、自分からお稽古ごとをさせてほしいとお願いするのは、とても我儘なことのように思えた。

しかし、母の答えは「自分の好きなことを学ぶのは大切なこと。休まずに

通えるのなら行きなさい。」と一言。その時の母は、いつもよりさらに大きく優しく見えた。



平成19年 毎日書道展 每日賞 受賞作品

それからと言うもの、風雨に負けず雪の日も休まず稽古に通った。そしてそのことが私の心と身体を健康にしてくれた。

ところが、無器用で何でも人一倍時間がかかる私。なかなか上達せず、苦戦している時に、恩師は目差す目標を山の頂上に例え、次のような言葉で励ましてくれた。

「一気に頂上まで駆け上がる力のある人と、ゆっくりではあるが遠回りをしながらも頂上までたどり着ける人がいる。同じ頂上を目指すなら、途中で回りの景色や草花を楽しめ、多くのことを経験しながら、じっくり登のいいものだよ。」この師の教え通り、うさぎと亀のよう諦めずに、一つの道を歩み続けてきて、本当に良かつたと、今心から思える。

しかし、漢字の臨書を始めたころはさすがに落ち込んでしまった。苦慮しているうちに夜が明けたことも何度もあった。「悩みながらも書くしかないだろう。」それが私の結論だった。苦慮して下された恩師や先輩方、挫折を乗り越えてくれた友人、蔭で支え、励ましてくれた家族…。

書を始めたことで、数えきれないほど多くの方々と巡り会い、さまざまのことを探していった。現在は下谷東雲先生亡き後、下谷洋子先生に熱意あるご指導をいただいている。

これからも、下谷洋子先生の書に対する姿勢を学びながら研鑽を積んで行きたいと思う。

最後になりましたが、この「書話シリーズ」の原稿依頼をいただきましたことにより、改めて自分と「書」との関わりの深さを気付かせていただきことが出来ました。貴重な機会を与えていただきました事を心より感謝申し上げます。

上していくこと。指導しながら学ばせていただくつもりで始めてみなさい。」と言つてくださいました。

このことがきっかけとなつて教室を開き、三十年近くになる。今でも、生徒に教える為に学び続けることで成長させてもらっていると感じている。

いつでも初心に還らなければと思う時、次の言葉を思い出す。千利休の師武野紹鷗の「いざれの芸も下手の名をとるべし」。奢を嫌つた紹鷗が、下手と思つてからも忘れる事なくこの言葉をこれからも忘れることなく「書の道」を歩み続けたいと願つている。

〈解説〉①・②すでに掲載ずみの文面ではあるが、「大阿闍梨（空海）の示された五八の詩（『中寿感興詩』の序に、『一百一十礼仏』・『方円図』・『註義』という書名がある。その詩の韻を和して返礼の詩を作つて差し上げたいが、私は『礼仏図』なるものを作らぬ。どう

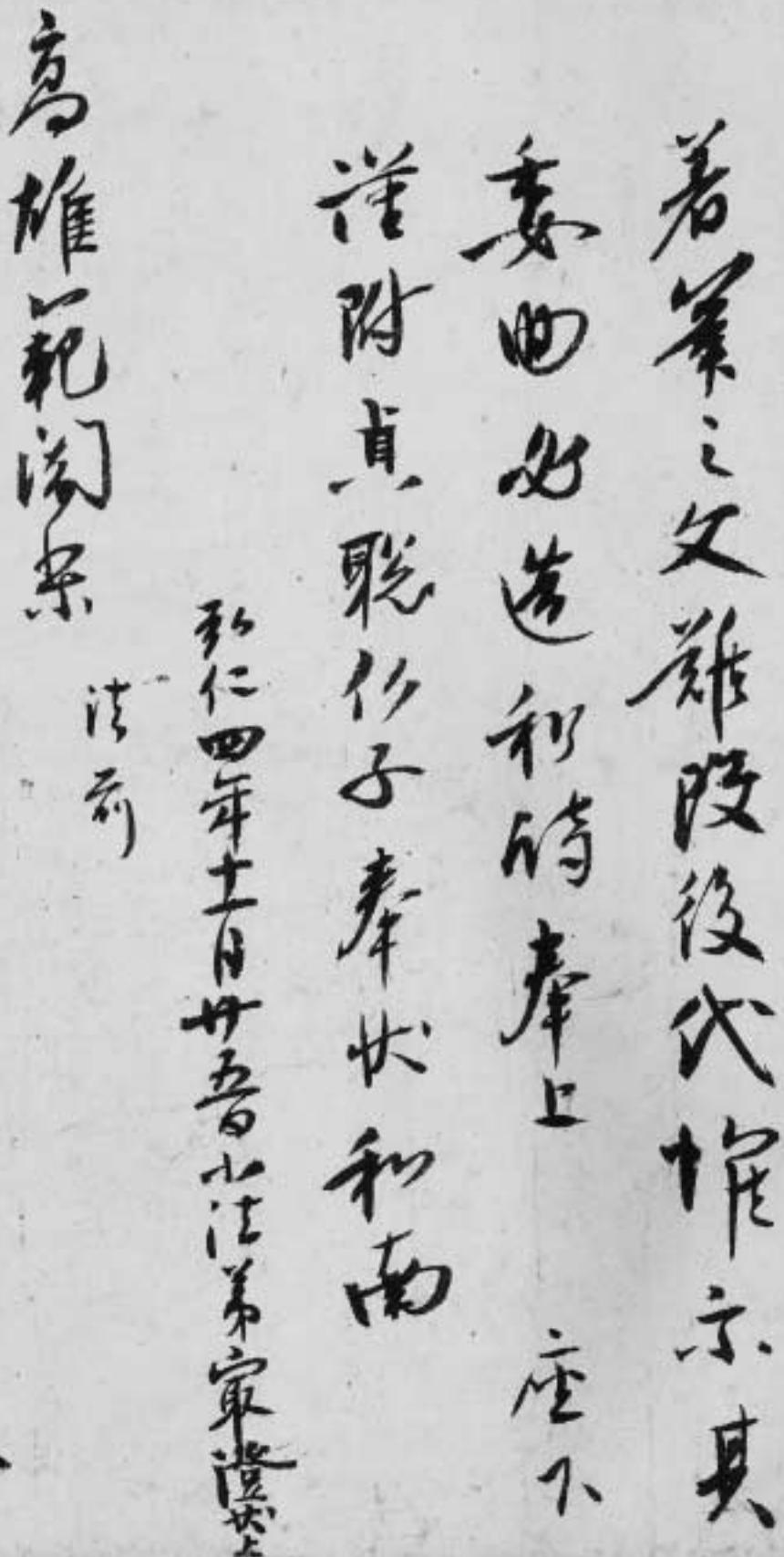
うかこの旨を阿闍梨（空海）に伝えられ、「方円図」・「註義」とその大意とをお知りいただきたい。（以下省略）」という趣旨の内容である。墨氣清澄で、王羲之の「集字聖教序」を肉筆化したような書きを放つ最澄の作である。

（編集部）

（掲載部分以外は不可）

用紙 半紙普通判
注

※落款を必ず
入れる
署名、もし
くは〇〇臨
(押印のみ可)



〈解説〉裏面には篩目に似た布目があり、篩がとおしとも呼ばれることから、「通切」と言う。

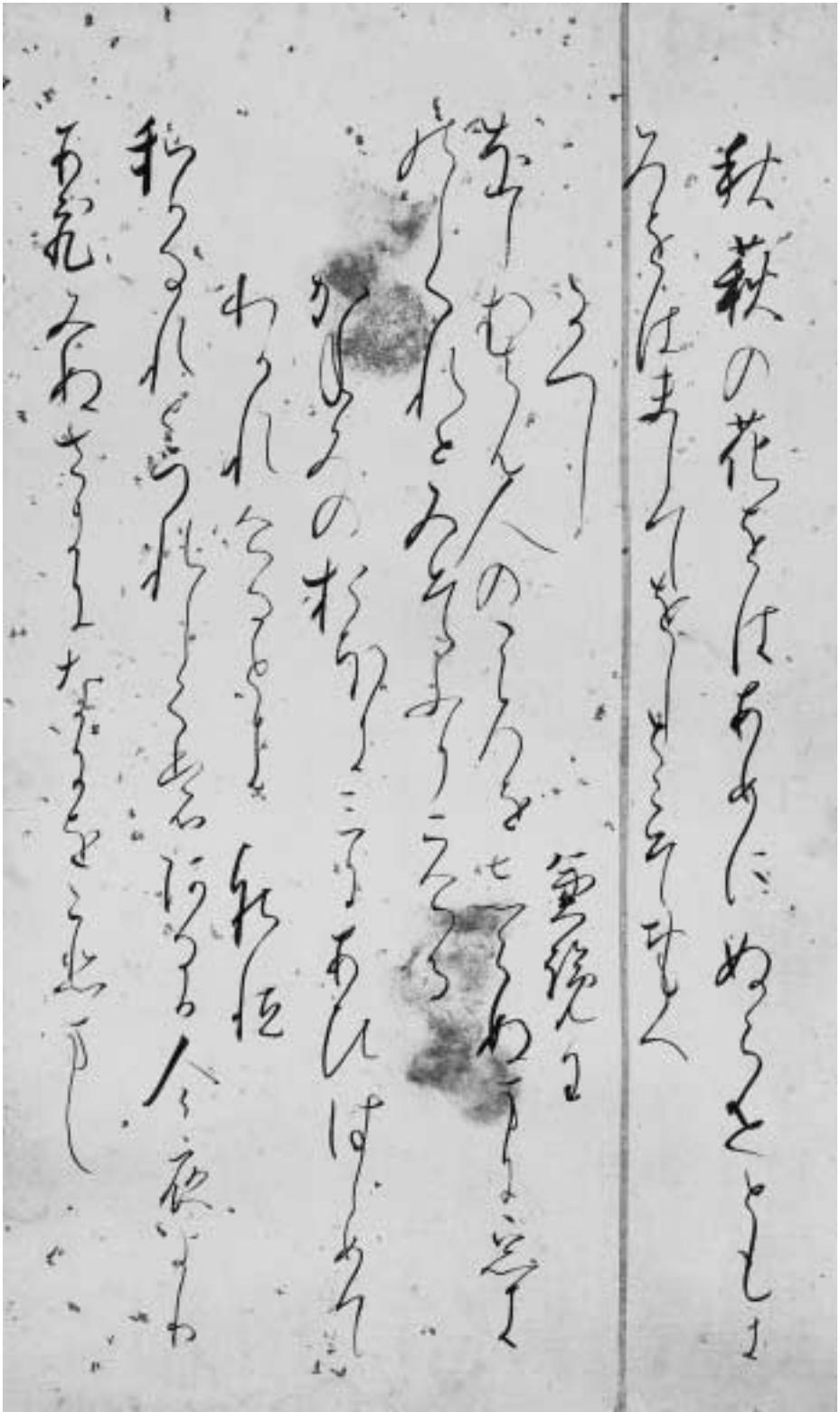
〈よみ〉
秋萩の花をばあめにぬらせどもき
みをばましてをしこそおもへ
かへし

兼 覧 王

をしむらん人のこゝろを志しらぬまにあき
のしぐれとみぞぶりにける
かねみのおほきみにあひはじめ

わかれけるとき
わかれけるれどくもあらか今夜より
あひみぬさきになにをこひまし

側筆氣味の暢達した線は優麗に流れるため、文
字の形は自然と縦長になっている。筆が進むに
つれ速筆になり、字形の崩れる所もある。筆者
は藤原佐理と云わたが、書風からして元永本
古今集と同様の藤原定実筆と擬定されている。



(掲載写真縮小97%)

※右記の掲載歌一首以上を書く(全臨も可) 用紙・半紙普通判(料紙可)

※落款を必ず入れる。署名、もじくは〇〇臨(押印のみも可)

習い方解説 (三)

大野祥雲

幽閑少是非
(幽閑是非少なし)

この課題、左右対称の文字が多い。それぞれの文字の点画の形成が大切。

「幽」三本の縦画と「玄」。多少

「玄」の太細を考え、筆先を利かして書く。

「閑」門構えの左右の違い。中にできた広い空間に「ホ」を

調和よく。

「少」一画目は比較的大い線、二画目は下げて長く、三画目は上げて細い点とした。終

画の左払いによって全体のバランスをとる。

「是」「日」は接筆に注意して明るく。下部は伸びやかに書いて全体をささえる。

「非」左右背勢の形。正しい筆順、左右の大きさ、気脈の貫通で生き生きと。

幽閑少是非 よみ (幽閑是非少なし)

書体=自由



習い方解説 (三)

種谷萬城

金生麗水
(金は麗水に生ず)

「金生麗水 玉出巖崗 (黄金は
麗水に産し、玉壁は崑崙山から産
出する。)」は千字文の中の言葉で
す。麗水は今の浙江省にある川の
名で、砂金を産し、この金は他
のあらゆる金より優れているそ
うです。

今月は、初唐の三大家の一人・
虞世南 (558~638) の書・
『孔子廟堂碑』の書風で倣書しま
す。

『孔子廟堂碑』の書風で倣書しま
した。虞世南の楷書は温雅な趣で
先が画の真ん中を通るように書く
を主とした筆法で書かれた線質は
柔軟で、穏やかです。形はやや向
上品、控えめ等と形容がされ、完
成度が高く、楷書の名品の一つで
す。品性の高さを感じます。

金生麗水 よみ (金は麗水に生ず)

萬城書

書体=楷書

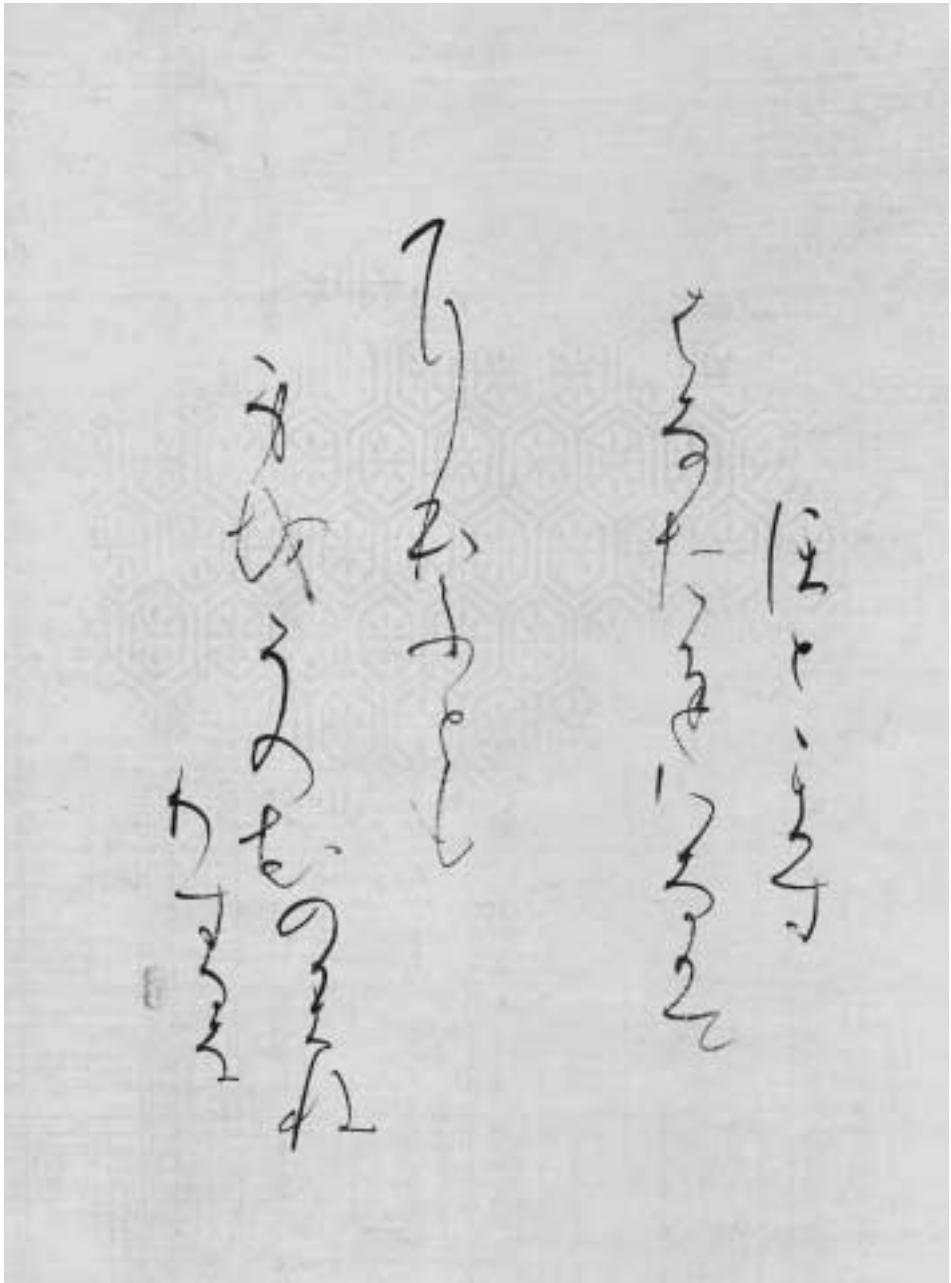


習い方解説 (三)

下谷洋子

ほとじます花橋はにほふとも
身をうの花の垣根忘るな

(山家集)



和歌一首を半紙版に散らすには、
概ね四~五行で書くと思います。
基本的には扇のようなまとめ方を
念頭に置いて下さい。重心を下げ
た方が安定感もよく、落ち着きま
す。

今回は線情について触れます。
かなを習った当初、中鋒の紡錘形
の線を練習したと思います。自分
の書いた線が、抑揚のない鉛筆の
ようになっていませんか? 書の線
は、筆でしか表現出来ない立体的
なもので。中鋒の線が出ない方
は、筆のおろし方不足(半分か三
分の一位)か、慎重になりすぎて
呼吸が小さく、筆先が上下動しな
いのです。かなの基本の線を思い
出して書いてみましょう。

よみ方

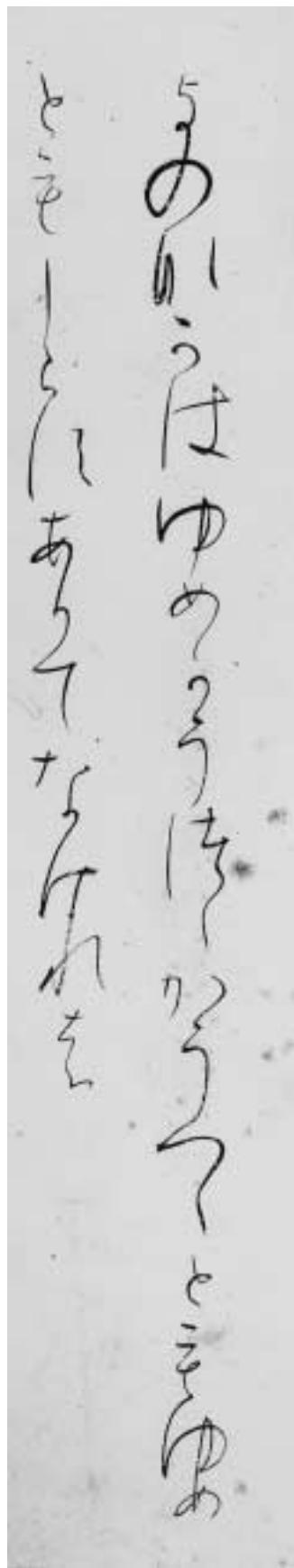
ほとじます花橋はにほふとも
身をうの花の垣根忘るな
(耳)ほ(本)ふとも身を(越)うの花のか(可)き(支)ねわするな(奈)

創作

かな規定 秀級以下【七月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切 第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 よ(与)のな(那)か(可)はゆめか(可)うつ(徒)ゝかうつゝとも(モ)ゆめ
とも(モ)しらず(須)ありてなければ(者)

習い方解説 (三)

木村東舟

ほのぼのと舟押し出すや蓮の中(夏目漱石)

手押と手や蓮のひ

かな条幅規定【七月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

木村東舟選書

(夏目漱石)

俳句は短歌と比べると字数が少
ないので、余白のとり方に苦労し

ます。定番の書き方の一つに今回
のように上五の「ほのぼのと」を
中七・下五の二行目に添わせる方
法もあります。文字が大きくなる
と、手先だけでの書き方では運筆
が小さくなるので、筆の高い位置
を持ち体全体で書きましょう。行
が立ち過ぎぬよう注意して下さい。

創作

よみ方 ほ(本)のと舟押し出すや蓮のな(那)か(可)

*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 [七月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

村野大仙選書

習い方解説 (三)

村野大仙



書体=自由

千峰鳥路含梅雨 五月蝉聲送麦秋
(千峰の鳥路梅雨を含み 五月の蝉聲麦秋に送る)

漢字条幅規定 秀級以下 [七月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

半田藤扇選書

習い方解説 (三)

半田藤扇

“竹やぶの奥のはなれですわる”
一行作品のまとめとして、草書
をとり入れてみました。

リズミカルな表現に、線の潤滑
の変化が調和すると魅力的な作品
になるのです。

また、白の中の黒との調和、つ
まり余白のとり方も大切です。

書体=自由



獨坐幽篁裡(裏)
(獨坐幽篁の裏)

今回は少し丸みのある線で温か
い味わいの表現にしてみました。
作品を美しく見せるためには終始
霧團気が統一されていることが望
られます。全体を眺めてみた時、
どこかに異和感のあるものは美を
損います。またそれに気がつくこ
とも大切な感性の一つで、自分で
発見出来たら素晴らしいことです。

習い方解説 (三)

西林乗宣選書

西林乗宣

ペン字規定【七月十五日締めきり】

「土佐日記」

土佐の国司の任を終えた著者の貫之が、承平4年12月に土佐を発して都に帰るまでの55日間を綴ったわが国最初のかな日記。送別、船中の人々の様子、苦楽、めずらしさ、帰京のよろこびなどが女性に仮託した文章で書かれている。

練習にあたって

筆記そのものの手書き二つ
①あさり 一月の日の成のちに
②ちす (土佐日記より) 。 。 。 え

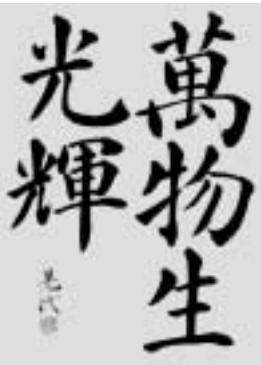
書体=自由

※落款を入れ忘れないようにしてください。
さい。(落款は自分の名前を入れてください。)

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

今月の

ホープ作品
各部総評 No.576



漢字部 師範 小林 晃代
のびやかで暖かい。悠悠としてあせらず気品を感じさせて落ちつく。

◎漢字部総評 自在な運筆で感覺的にすぐれていても古典で基礎的な字形や用筆の理を会得していない作品は落ち着かない。(春洋評)

漢字部 師範 小林 晃代

のびやかで暖かい。悠悠としてあせらず気品を感じさせて落ちつく。



現代詩文書部 特選 土居 京仙

明るくシャープな運筆。「たつぶりと」の表現は流れるようなりズム感あり、爽快な作品となった。

◎現代詩文書部総評 大作と半紙判の作品制作の違いを理解できた方が、成功している。(素雪評)



漢字部 師範 藤村 昌子

かな条幅部 準師範 藤村 昌子
背筋の通ったリズムが軽らやかに舞い下り、無理のない運筆で清雅。墨色にも丁寧な姿勢が伺える。

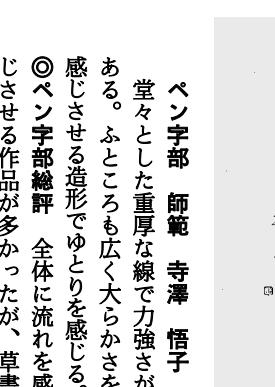
◎かな条幅部総評 字粒が大きすぎたり小さすぎたり、まだ安定した把握が出来ていない会派あり。拡大コピーの活用を。(洋子評)



前衛書部 特選 佐々木紅楓

墨色の変化と線の厳しさ、リズミカルな筆使いで全体を嫌味なくまとめている。

◎前衛書部総評 線質の弱さが一部目立ちました。日頃から古典で腕を磨きましょう。(光昭評)



ペン字部 師範 寺澤 悟子

かな条幅部 準師範 寺澤悟子
堂々とした重厚な線で力強さがある。ふともも広く大らかさを感じさせる造形でゆとりを感じる。

◎ペン字部総評 全体に流れを感じさせる作品が多くたが、草書の形が流れすぎた作もある。文字の形をしっかりと。(蒼玄評)

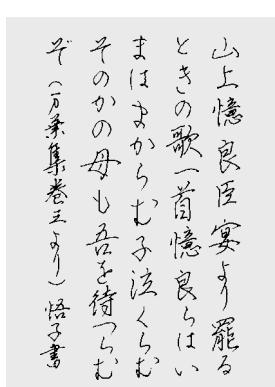
漢字条幅部 師範 鷺山美佐子
のびやかな筆致で滋味溢れる隸書表現。石門頌の味わいを生かし安定感ある作である。

◎漢字条幅部総評 条幅部は書体自由である。種々の書体、書風への挑戦を行って基礎力の応用展開へとつなげたい。(大雲評)



かな部 師範 川本 南汀
丁寧な手本の研究は、古典美に通じる格調ある作品となりました。さらに個性的加味を望みます。

◎かな部総評 完成度の高い作品が多かったが、個性的表現が少なく残念。むと遠の誤字が上級者にも多発。字は正しく。(明子評)



◎かな部総評 完成度の高い作品が多かったが、個性的表現が少なく残念。むと遠の誤字が上級者にも多発。字は正しく。(明子評)

今月の

特別研究品（特選）

前衛書

(四谷)

角田悠香

「童話集」



70×136cm

- ◆ 前衛作品のタイトルは不思議です。塊と直線、白のバランス、どこかに夢を内抱して、それぞれの動きは楽器をかき鳴らして響きかけます。
(洋子評)
- ◆ 丸味のある深い墨の輝きが白に反映してやわらかな雰囲気をもつていて。題名「童話集」わかるような気がして楽しい。
(春洋評)

(春洋評)

- ◆ 丸味のある深い墨の輝きが白に反映してやわらかな雰囲気をもつていて。題名「童話集」わかるような気がして楽しい。
(春洋評)
- ◆ 丸味のある深い墨の輝きが白に反映してやわらかな雰囲気をもつていて。題名「童話集」わかるような気がして楽しい。
(春洋評)

(倫子評)



工藤永翠書

180×60cm

「白珠」工藤永翠

現代詩文書

総評

ルノアールは初期は輪郭のしっかりした絵画を描いていたが、晩年になるとその輪郭がぼやけますに絵の中から光が差し出すような表現になった。これも一朝一夕で成し得た事ではない。また、大家と呼ばれるようになつても“私は絵の職人だ”と言つたという。感覚の修練も大切ではあるが、併せて技術を研ぎ澄ます鍛錬も重要なことである。今日は86点(漢19、か8、現34、前23、篆2)毎日展も61回を迎える。還暦とは干支の組み合わせで60年ではあるが、一つの時代が終わり新しい再生という意味も含まれる。1、2年の事を考へていると進歩はないように見える、しかし絶えず努力して出品することにより次のステップを踏むことができる。
(蒼玄)

漢		馬場		寿舟		佐藤		希雲	
八幡	芳蘭	角張	芳蘭	大雲	長島	千葉	渡辺	浅野	紅葉
書泉	吉田	加藤	紫翠	蓮紅	扇溪	前田	行徳	彩紅	紅蓉
卯月	眞理	白嶺				佐藤			
東実	光泉	千葉				希雲			

◆ 微妙な線の変化で、長鋒、濃墨の細線が揺らぎながら進む。密集させた行の行間の配分と潤筆の沈潜さが自然に巧く噛み合い、逸格の感性。
(洋子評)

◆ 筆先の鋭さを生かし濃墨の墨のこさで見る者の心に一息きつかせてくれるるのは心にくい気くばりは紙面全体にリズム感が溢れている。
(倫子評)

◆ 二双紙の質感を生かし、潤渴の変化で重層的な筆致を見せている。墨色の幽玄微妙な味わいを立体的に見せて鮮明な作品である。
(大雲評)

◆ 体全体を使って線を構成、余白が計算されたのではなく自然に表現された感心をうきさせてくれる。欲をいうとかすれの線に味をつけて。

かな
(書泉)

坂口 とし子

「夏の夜」



坂口 とし子 書
165×53cm

◆二×六に一首を三行構成する力量は充分に現れている。前半二行をやや大き目に、三行目を小ぶりにした構成も自然な変化を見せていている。(大雲評)

現代詩文書 (うるいど) 今 閔 心 華

「たしかなこと」

◆墨ならでは表現出来ない色の変化と同時にかすれを取り入れて紙面に変化を持たせこの長い文面をあかずに眺めさせてくれた。(倫子評)

◆割れた線の荒さをリズムとし、淡墨でなごませた独特の雰囲気が面白い。字粒の大きさがこの表現には適い、詩の内容にも寄り添っています。(洋子評)

◆長詩を自然に書きつづり、墨無くなれば墨を継ぐ。青墨の潤渴が表現上の面白さといえようか。ここで踏み止まって深めるも一つの見識か。(春洋評)

◆鶴毛筆使用か、やや読みにくい感はあるが、独特的の破筆から表現されるりがりを感じさせる。(大雲評)



174×55cm

漢字 (恵雅)

板橋 雅邦

「花影紙窓更」



180×60cm

今 閔 心 華 書

板橋 雅邦 書

◆とにかく縦横無尽、一気呵成な動勢に息を呑みました。ここで大胆に多彩な表現が出来ることにある種感動。落款が少々雑で残念です。(洋子評)

◆個性の書、感性の書、古典の姿を感じさせない字形、こんな凧から、新しい現代の書が生まれる可能性あるかも。理にかなった運筆も一考を。(春洋評)

◆気迫に満ちた大胆な運筆と構成力に感服する。やや粗さも感じるが、この位の思い切った取り組みを大いに推奨したい。押印少し雑です。(大雲評)

◆筆と墨と紙のよさを一体化して造りあげた作品。一見して息をつく間がないのは…。激しさが表に出すぎてしまい一息つく間があつても。(倫子評)

◆流れるような筆の動きその中で一息とめて筆の廻転で細い鋭い線、見事に合致して大きな紙面を生きとまとめて見せてくれる。(倫子評)

◆大きな呼吸で骨のあるかなを書ききました。やや細身の線ですが、行の広狭で三行を巧くまとめた緻密な作品です。どんどん挑戦を!。(洋子評)

◆骨格のしつかりした線と、納得できるまとめ方、書き込んで個性的になるまで書き込んでください。この強い線質を基調として…。(春洋評)

◆流れのような筆の動きその中で一息とめて筆の廻転で細い鋭い線、見事に合致して大きな紙面を生きとまとめて見せてくれる。(倫子評)

◆大きな呼吸で骨のあるかなを書ききました。やや細身の線ですが、行の広狭で三行を巧くまとめた緻密な作品です。どんどん挑戦を!。(洋子評)

◆骨格のしつかりした線と、納得できるまとめ方、書き込んで個性的になるまで書き込んでください。この強い線質を基調として…。(春洋評)

漢字研究部
(久隔帖)

選評 大野祥雲

今月のホープ作品



角田花城



和華惠秀雪抱
子炎舟圃簾遊

絹叙千啓多智
惠
子舟美子佳子

岱惠雅泉志心
雲子芳佳朋華

邦藤紅竹幸裕
侑子谷霞葉苑

漢字研究部 特選 角田 花城
直線を主体にした切れ味の鋭い作品です。法帖のよさを十分消化し、ご自分のリズムで生き生きと運筆。落款を見ても相当書歴のある方だと推察。最澄も分からぬ箇所ですが、ことばとしては、「方円図」が切れました。

◎漢字研究部総評

久隔帖の結構も清淨さを十分くみとて臨書されたでしょうか。作品を見せていただく

と、かなり難かしい課題だった方もあったようですね。あまりにも品格が高く、近寄りがたさがあったのかもしれません。
進度によっては、次のような基本点を見付けての学書が大切です。(1)筆管を幾分右に傾けた静かな始筆。(2)大の始筆のよう強いものもある。(3)久大八の紡錘形の右払い。(4)馳和且の長い横画。(5)白を含んだ縦長の字形。

かな研究部 (筋切)

運評 山藤 美知子

今月のホープ作品



優昭寿

龍星照

菊睦嵐

淳智悦

子二子

貞祥芳

枝子泉

子子子

N書こ千大八高
H泉だ葉阪街崎

秀

作

伊伊五飯飯熱青
藤藤十田田木木江
良則佳光恵萩桂
佑子栄彩萩形子

高陵佳

作

山村三松平林西寺田高高
崎田鳴丸佐山澤岡澤中橋
勇介

作

桜笑敏愛白彩雙彩悦悟蒼雅幸杏澄萩桂町しつ喜雅路彩惠信萩美春香楠光紫

作

江華子石鈴華鶴峰子泉苑華翠碧香華子え子兩舟子光子華綠麗子邦

澄洞八竜春書街泉入

作

飯安足浅馬連藤助川み実
紫楊実な富江

作

硯春東高八

作

佐佐佐酒齊後五

作

佐和節恵永良知美史晃芳智惠竹豊香和尚秀

作

芳子子舟丹子江代萩子子葉美蘭心子子祥西龍代汀雲扇香惠代子萩繪鉢

作

春明も竹佐大竜も艸春硯澄千稻玄大秀大秀権詢京蓮清正己墨さ千大正華春清東宮竜安英声

作

選汀漢く美倉阪泉く玄汀水春葉毛穹阪水翠扇橋紅雪華未縁つ葉阪華祥汀雪岳城泉波峰香

作

168吉吉横山八森森村富宮宮松細二藤福比花橋野西成長永中中中戸富知玉田千砂鈴鉢鈴鉢菅神新志志波柴七紫椎猿澤佐佐

作

名原田種山口木田田木野澤内重村上井島田里本村村澤島井山村島田念木原歲川木木木木木谷保谷村水谷

作

姓氏三千枝鶴藤蘭絃龍藤珠津草幸翠貴紫智歌代智日陽桂香一宏尚美豊博萩律蕙惠倫琉昌利多香悦佳翠抱起愛翠裕煌幸冬雙初淳

作

名枝鶴藤蘭絃龍藤珠津草幸翠貴紫智歌代智日陽桂香一宏尚美豊博萩律蕙惠倫琉昌利多香悦佳翠抱起愛翠裕煌幸冬雙初淳

かな研究部成績表

都丸みどり

◎かな研究部総評
漢字を連綿体のように數文字を一筆で書きつづけたり、点画・用筆もよく変化して、運筆速く、巧妙ズムで流動している特色をよく把握した作品が多くた。拡大臨書はリズムに乗りにくいので要注意です。

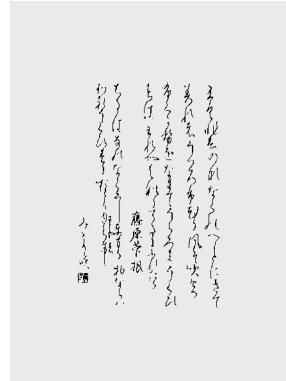
かな研究部特選
都丸みどり

縦長の文字で、起筆から送筆、收筆まで美しいりで筆勢のある筋切の典型的な秀作です。

かな研究部
(筋切)

運評 山藤 美知子

今月のホープ作品



かな研究部特選
都丸みどり